

《MIRAI.新聞、コースケ近況編》

主旨

今号は私コースケがお届けします。

私は、「躁うつ」という特性を持っていますが、この前の7、8月は、自分自身の制御が、自分自身にとってもさえも難しい「乱気流モード」でした。

その激流を、僕がどう乗り越えたかを、面白おかしく書けたらなあと思います。

そう、これはテーマは重いけど今号のMIRAI.新聞の本質は「喜劇」です。

決して「悲劇」やあらへんで〜♪ (笑)
では、さっそく参ります！

起承転結の「起」

乱気流モード突入の引き金を引いたのは、私の母でした。

私の嫌いな母のよくやることとして、「結論の先取り」というものがあります。

僕が物事を説明している途中に「ああ、つまりこういうことね」と、僕話を遮ってまで口を挟んでくるのです。

そしてそれは、たいてい僕の言おうとしていたことと全然違います。

その晩も、母がそれをしてきました。

私は、

「お母さん、お母さんのそういうところ、ホントやめてほしいんやけど！」

と言いながら床を

「ダン！」

と強く踏みました。

私は、ただの意思表示のつもりでそれをしてただけだったのです。

…そしてその数十分後、僕の見間違いで、あることに対し、

「あれ？お母さんこれ間違ってるやん。あ、ごめん俺の見間違いやったわ。合ってる合ってる。ごめんごめん」

と私が母に言ったことがありました。

すると私の言ったことを受けて母は、ニヤツとした顔で私の真似をして

「ダン！」

と床を踏んだのです。

私はかなりカチンと来ました。

「おちょくられた」としか感じられなかったのです。

「結論の先取り」をよくしてくるくらい、理解力がないくせに僕の話をも早く切り上げたがる母にもちゃんと伝わるように、私は母に叱りました。

「怒る」ではなく「叱る」のつもりで口を開いたのです。

私は母にこう言いました。

「お母さん、さっき俺はお母さんのしたことが本当に嫌やったで、床を踏みつけてもたんやで。多分やけど今のお母さんはこの俺のおっちょこちょいなことに、そんなに嫌悪感を感じてないのに、ただ拗ねた心での俺への当てつけのためにおれをおちょくするようなことしたやろ？ ふざけんな！！！」

…

うわー！！

激動の「乱気流モード」、完全に幕が開けてしまったぜー！！

起承転結の「承」

さて、足早にその場を去った私は、父の部屋に行きました。

父に私の心を安らがせてもらうためでし

た。

しかし父の口から出た言葉は…、

「あいつはすぐ話をすり替えてまうんや」

「そうやよなあ!!!」

聞けば聞き腹ということわざがあるように、父にその言葉を聞かなければ徐々に収まっていた怒りが、再び再燃してしまいました。

そして私は母に文句の一つでも言わなきゃ気が済まなくなっていました。

先ほど去ったばかりの廊下をまた自ら逆戻りし、母に文句を言いに行きました。

「お母さん！ オヤジも俺と同じ意見やと!!!」

すると母は、

「もうお母さんはいない方がいいんやなあ」

「ちーがーう!!! (ダン！ダン！ダン!!!)」

私は床を踏み抜くんじゃないかというほどにまた床を強く踏みました。

ここでも母の「結論の先取り」が発動してしまいます。

私は母がいない方がいいとまでは思っていなかったのに、「結論の先取り」をされて、かつ、その結論が見当違いであることに、強く怒ってしまったのです。

しかし、やはり母には伝わりませんでした。

むしろさっきより悪く誤解をしたことは確実のようでした。

そこで私は端的に、

「お母さんは一言多いんや」

と言いました。

すると母は

「でもお母さんは〇〇で△△が××なんやで…」

「そーれーや!!! (ダン！ダン！ダン!!!)」

私はその十数秒前と全く同じ怒り方をします。

しかし母がさらに誤解をしたことは、火を見るよりも明らかでした。

「お母さんそれがまさしく『一言多い』って解ってる?!」

「でもお母さんは…」

「それや!!!」

私は母の言葉を遮ります。

「それがまさしく『一言多い』んやぞ。普通よく判らないけど自分が失態をしてみたらしいときは、それが判るまで『はい。ごめんなさい。申し訳ないです』くらいで済ますもんやぞ！」

「はい、ごめんなさい、申し訳ないです」

母はめっちゃ拗ねたような心のこもらない棒読みの声でそう言いました。

私は母に今は何言っても響かないらしいことは解っていたし、何より、自分の心の平静のために、その場を去りました。

そして私は二階に上がって自分の部屋で好きに過ごしていたのですが、その二時間ほど後、めっちゃ疲れた足取りで階段を上がってくる母の足音が聞こえます。

そして階段を上りきっても、のそっ、のそっ、と、重い足取りで私の部屋の前を横切り、自分の部屋へと入っていきます。

私はさすがに「言い過ぎたかな」と思い、母の部屋へ行きます。

そして私が話しかけると母はまるで明日がもう来ないことが確定したかのような顔で

「お母さんもうどうしていいかわからん…」
と言い出しました。

そこで私は、
「ああ、どうしていいかわからんのか。じゃあ、どうすればいいか教えようか？」
と言います。
母はやはり世界が終わる寸前のような顔で
「うん」
と言います。
私はそれを受けて母に言葉を紡ぎます。
「お前は言葉が『軽い』んや。だから一言多いようなことがお前にとって日常茶飯事になってまうんや。言葉を、もっと重く受け止めなさい」
そうゆっくりと言いました。
母は何かしら受け取った顔をしていました。
…
でも、その後、我が家庭はもっと大揺れに揺れることになります。
そのことについては次項にて。

起承転結の「転」

その大揺れの揺れとは何か。
それは父と母の離婚騒動です。
その前にまず父について紹介します。
父は、はっきり言って変な人で、僕の見立てでは何かしらの知的障害を抱えていると思います。
父には、こちらから何を言っても本当に汲み取ってもらえないのです。
こちらが何か言うとすぐ論理のすり替えをしてくるし、ちゃんと理解してもらおうとステップを踏んで説明しようとするので、スーッと、場を去って行ってしまふのです。
本当に理解力が欠如していると言うか、父は自分の創った偏った世界にどっぷり浸

かっているのです。

そして、外っ面だけよく、家の外ではすました顔をして、家の中では自分の父である私の祖父や自分の妻である私の母に八つ当たりをするのです。

本当にまともじゃないのです。

そのため私は父と母が衝突すると、いつも母の肩を持ってきました。

しかしここに来て、私は思い出してしまっただけです。

私は中学生の反抗期のころ、母が私の仕事を見て、こういう態度だからこういう意地表示に違いない、と勝手に解釈をして、それは私のことなのに母が勝手に話を進める、という事がよくありました。

私の反抗の第一声はいつも決まって「勝手に決めつけんといてや！」

でした。

そう、父の言うことも一理あるのです。

そして私は父の肩をもつ側になりました。しかしそれが父の暴君気味を冗長します。しかし私は知らんぷりでした。

どっちも悪いからです。

勝手にやったら？ というような感じでした。

そして数日後、私がリビングに入るとそこでは既に言い争いが展開されていて、ちょうど母が

「そんなんやったら市役所で離婚届もらってくるわ！！」

と言い出したところでした。

しかし私は冷静でした。

「そっか、お母さんこの家出てくんやね。どこに行くか知らんけど、向こうでも元気で」

すると母は、私もついてきてくれるもの

と思っていたのか、物凄く複雑な顔をしていました。

起承転結の「結」

「お母さん、いつ出てくんや？」

「ちょっと考える」

...

「お母さん、いつ出てくんや？」

「少し頭冷やそうかと思う」

...

「お母さん、いつ出てくんや？」

「やっぱり考え直そうかとも思ってきた」

...

「お母さん、いつ出てくんや？」

「やっぱりもう少し頑張る」

私の塩対応に、どんどん心細くなったのか母は勢いが失せていきます。

そうやって、我が家の離婚騒動は収束していきました。

そして私は解ったことがあります。

それは、母も「老化」してしまったんだなという事。

それによってポンコツ化してしまったのだが、今までそのポンコツ化を誘発してきたのが、私の言動であったという事。

もちろん今でも母に不満なところはいくらでもあります。

例えば、心配という私のためという名目で私を縛ろうとするところ。

例えば、私の声がうるさいとか言って私の声を聴こうとしないこと。

例えば、前述の結論の先取り。

母への不満はいくらでもあります。

でも、私の半分は母で出来ています。

だから、私は母を切り捨てることはできない。

それは自分自身の半身を切り捨てることでもあるから。

そして同じ様に、私のもう半分は父でできている。

だから父も私は見捨てられない。

父と母の関係を取り持つのが私の役回りなんだと今は感じています。

長くなりましたが、私はこうやって「乱気流モード」を乗り越えました。

「乱気流モード」も、これにて三度経験したので、もうこれほど揺れることはないと思います。

長くなってしまいましたが、ご清読ありがとうございました。